



コロナショックを受けて改めて検証する

市場変動に強い投信・弱い投信

全天候型オールマイティ投信は存在するか

島田知保

イボットソン・アソシエイツ・ジャパン株式会社
『投資信託事情』編集長



コロナショックにより激しく揺れ動くマーケット。こうした市場激動期にも安定した成績を残す投信は存在するのか。過去10年程度のデータをもとに市場変動に強い投信を探してみた。

予断を許さない 市場動向の中で

株式市場が暴落すると、少なからぬ投資家が不安と恐怖を感じて投資資金を引き出してしまったり、積立をやめてしまったりする。

暴落の影響が表われるのは含み損としての数字で、引き出さない限り実際に損失にはならないのだが、「このまま保有しているとしても下落してしまうかもしれない

い」という恐怖に駆り立てられて解約してしまうのだ。

新型コロナウイルスがグローバルに拡大する中、今年の3月中盤には世界各国で一日に10%を超えるような株式市場の下落が起こり、投資家の市場への不安を示す恐怖指数は85・47まで跳ね上がった（同指数の世界金融危機時の記録は89・53）。

もっとも、今回は各国とも財政出動など危機回避のための政策対応が早かったこともあり、これま

でのところ想定以上に速いスピードで市場は回復を見せている。

日本の投資信託も3月から5月までは資金が純流入しており、リーマンショック後の金融危機のときと比べて顧客の行動は落ち着いているようにも見える。

しかし、6月はETFを除くと資金は流出。基準価額が上がったことで我慢していた投資家が「やれやれ」と売却に動いた。

コロナ危機収束の目途が立たないことが、多くの人にとって不安要素であることがわかる。このまま市場は安定するのか。日本でも感染者数が再び拡大傾向を見せる中で、今後の市場の動向は予断を許さない。

さらに、コロナウイルスの問題だけではなく、日本国内だけでもこの間に集中豪雨や、地震の頻発など様々な不安を呼ぶ災害が起きている。

たとえ今後何らかの理由で市場が下落することがあっても、相対的に運用成績が悪化しない投信は

ないのか——。お客様のためを思えばこそ、投信販売の現場からそのような声上がるのは自然なことだろう。

ただ、今回の値下がり短期での戻りを見るだけでは、その投信が将来も同じように値動きするとは限らない。そこで、十分とは言えないが、せめて過去10年程度の実績を見ることで、市場の変動に強い投信探しを試みよう。

市場追随率で 日本株投信を評価する

「他の投信が下がってもそれほど下がらず」「上がるときには他の投信より上昇する」——そんな投信はあるのか。

市場の上昇時と下落時を分けて、それぞれの時期にベンチマークに対してどのような値動きをしたかを見るには、市場追随率（マーケット・キャプチャー）と呼ばれる指標がある。

アクティブ運用を行う投信の中

で、最も市場指数に勝ちやすい投資対象は日本株式だ。そこでアクティブ運用を行う国内株式投信について、過去10年の市場追随率を見てみよう。

ベンチマークを東証株価指数とするため、対象は大型株型とした。市場変動に応じて現金比率を機動的に変更する投資戦略が奏功したか否かを見るため、キャッシュバランス型も加えた。

6月末時点で運用実績10年以上、純資産が50億円以上のもので50本について、上昇追随率（東証株価指

数に比べて値上がり大きい順）、下落追随率（同、値下がり小さい順）を順位づけし、合計した順位の値が小さかったトップ10の投信が次のページの図表1だ。

首位の「One国内株オープン」（アセットマネジメントOne）は上昇時2位、下落時8位で合計順位の値は10だった。

2位の「三菱UFJグローバルイノベーション」（三菱UFJ国際投信）は日本を含むグローバル株式に投資する運用方針だが、国内株式が7割以上を占めるため、国内株式の分類に入っている。上昇時5位、下落時7位で合計値は12だった。

トップ10のうち上昇時も下落時も10位以内だったのは、この2本のみだ。

3位の「スパークス・新・国際優良日本株ファンド」（スパークス）は上昇時13位、下落時3位で、下落時に強かったことがわかる。

これら上位の投信の多くは、上昇時か下落時に大きな強みを持ち

